発達障害のある看護職員・看護学生への支援を考える
― 2026 年度ユニフィケーション研修会を開催しました ―

看護連携型ユニフィケーション事業協議会

2026 年 8 月 24 日（月）、島根県立大学出雲キャンパスのラーニングコモンズにおいて、「発達障害のある看護職員・看護学生の支援について」をテーマに、2026 年度ユニフィケーション研修会を開催しました。本研修会は、教育機関と臨床現場がそれぞれの経験や課題を共有し、発達特性のある看護職員・看護学生への支援をともに考えることを目的としたものです。島根県立中央病院、島根県立こころの医療センター、島根県立大学から 62 名が参加しました。

講演とグループワークを通して、支援のあり方を学ぶ

研修会では、順天堂大学保健看護学部の北川 明教授による講演とグループワークを行いました。参加者は、発達障害や発達特性に関する理解を深めるとともに、学生・新人職員への具体的な関わり方や、一人ひとりの特性に応じた支援の工夫について、体験的に学びました。

参加者の学び―「本人と一緒に考える」支援へ

研修後のアンケートでは、研修会への満足度と学びの到達度について、肯定的な評価が多く寄せられました。参加者からは、「分かりやすい説明とグループワークで体験的に学ぶことができた」「発達特性のある人への支援方法を改めて学び、自分自身の理解を振り返ることができた」「新人教育や児童思春期看護にも応用できる」といった感想がありました。

また、支援する側の見方だけで判断するのではなく、まずは相手との関係を築き、困りごとやこれまでの経験を丁寧に聴くこと、そして、本人と対話しながら解決方法を一緒に考えることの大切さに気づいたという声も聞かれました。これらの学びは、合理的配慮を単に一律の対応として捉えるのではなく、本人と支援者が対話を重ねながら、よりよい学習環境・職場環境を整えていく視点につながるものでした。

教育と臨床の連携を、今後の支援につなげる

一方で、「事例ごとにどのような支援が適切か迷うことがある」「臨床現場では、学生時代と同じような配慮が難しい場合もある」といった意見もあり、個々の状況に応じた支援の難しさや、周囲の理解と協力の必要性も共有されました。

今回の研修会は、大学と臨床の参加者が互いの立場や経験を持ち寄り、発達特性のある看護職員・看護学生を支援するための課題と方向性を考える機会となりました。今後も 3 施設で連携し、本人の強みを尊重しながら安心して学び、働くことのできる支援体制づくりに取り組んでまいります。



